

2011年1月3日

博士学位論文審査報告書

大学名	早稲田大学
研究科名	人間科学研究科
申請者氏名	村橋俊之
学位の種類	博士(人間科学)
論文題目	中国武術の文化産業化：少林寺武術を事例として Industrialization of Culture in Chinese Martial Art: Shaolin kungfu as a case example
論文審査員	主査 早稲田大学教授 寒川恒夫 学術博士(筑波大学) 副査 早稲田大学教授 森本豊富 Ph.D.(UCLA) 副査 早稲田大学教授 蔵持不三也 博士(人間科学)(早稲田大学)

中国の文化政策は、1978年に始まる鄧小平の改革解放を境に、大きい変化をみせる。それまでの毛沢東主義的共産党文化イデオログとしてのあり方のほかに、社会主義市場経済性を付与されたのである。そして1990年の優秀民族文化政策が、それまで封建主義的として排されていた民族文化を中華民族凝集の核と積極的に評価し、また2000年に文化産業政策が打ち出されるに及び、中国における民族文化の産業化が本格化する。そしてそうした産業化民族文化の重要なひとつに武術があった。

本論文は、こうした時代背景のなかで、それまで体育やスポーツとしてのみ位置づけられていた武術が、政府の文化産業政策の下でどのようにして中国文化の象徴という重要な役割を演じるようになったのかを明らかにしようとしている。そしてそのために、中国武術のなかでも最も影響力の大きい少林寺武術(少林カンフー)が事例に選ばれた。論文の全体は7章から成っている。

「はじめに」の章では本研究の目的と方法が述べられ、先行研究が検討される。先行研究は、中国、日本、欧米において発表された中国武術の産業化を扱った論文と著書がレビューされ、そこから、これまでの研究は武術をビジネスとして展開するための経営学的アプローチが中心であったこと、また中国武術の文化人類学的研究においては武術とナショナリズム、武術とイデオロギーの関係を論じたものがみられるものの、本研究がめざす産業化の視点から分析する試みはいまだ着手されていない状況が導き出される。

「現代中国における文化政策」と「現代中国における文化産業化政策」の章は本論文の背景をなす部分で、中華人民共和国成立後における政府の文化理解と文化政策の変遷が中国側資料の精緻な分析によって再構成される。すなわち、鄧小平の改革は社会主義市場経済をもたらしたが、同時に文化政策の変更をも促した。その変化の特異な例が共産党政治局常務委員の職にあった李瑞環が1989年に発表した「優秀な民族文化を宣伝し広めることに関する若干の問題」論文であった。李は前年に起きた天安門事件を政府の文化政策

の失敗と断じ、社会を安定させるには国民が求める多彩な文化を提供することが必要であるとみて、その例として、文化大革命が徹底否定した伝統的な祭礼など民族文化の復活と振興を提唱したのであった。もちろん、そこには、「寓教於楽」の原則が求められ、愛国主義や社会主義の育成といった党の政治的おもわくが込められていたことは明らかなものの、また国内の社会安定とともに台湾や世界に散住する華人を中華民族として統合するための手段として民族文化が期待されたことも明言されていたものの、民族文化が肯定的に評価されたことは産業化にとって大きい一歩であった。その後1999年に中国教育部が発表した「中国に特徴的な社会主義文化研究」では、文化と社会主義市場経済との結合、また文化を経済発展に寄与させることの重要性がうたわれるようになる。そして2000年には「文化産業発展第十次五年計画綱領」が発表される。政府文書が初めて文化産業の表現を用いたのである。そこでは、経済発展に伴う国民平均収入と余暇の増大による文化への消費要求の高まりに対する文化産業の立ち遅れが具体的な数字によって示され、需給のアンバランスの是正が指示される内容となっていた。

こうした文化政策の産業化の流れは、少林カンフーの産業化を導いた。「事例分析」の章では、少林カンフーの産業化過程が分析されるが、2004年の「功夫伝奇」、2004年の「印象・劉三姐」、2007年の「禅宗少林・音楽大典」が分析対象に取り上げられる。最も影響力が大きいと評価されるためである。

「功夫伝奇」は北京市崇文区の紅劇場において2004年7月から公演されるカンフー劇である。功夫はもともと仕事や工夫を意味する語であったが、アメリカで中国武術を功夫の広東語発音である kungfu と呼ぶようになって広まり、中国に逆輸入されて武術を指すのに用いるようになった経緯がある。また伝奇は小説のジャンルのひとつで、現実離れしたストーリー展開をもつものを言う。功夫伝奇ショーを創作したのは曹暁宇であった。彼は8年に及ぶアメリカ滞在でアメリカ流のショービジネスを学び、2002年に帰国すると外国人向けのショーを企画するが、そのテーマに選んだのがカンフーであった。中国的なるショーとしては京劇が定番とされた時代にあって、曹は市場調査により京劇に対する外国人の興味の低さを知る。そこで、スポーツ的でもあり伝統文化的でもある、その意味で両価的であいまいで不可思議なイメージをもつカンフーに注目し、試みに、少林寺をもつ河南省登封市のとある武術学校において「少林魂」というカンフー・ショーを上演する。ショーでは、少林寺が中国における禅宗の祖地であること、少林僧は修行と武術を融合させた神秘的なカンフーを作り出していたこと、そうしたカンフーは攻防や健康といった身体性のみならず仏教の悟りという深い精神性を孕んでいることなどの紹介に始まり、つづいて頭で鉄板を割ったり、5本の槍で身体を持ち上げるなど尋常でない身体性を見せる舞台となる構成であった。アメリカ人パートナーの絶賛を得たことで曹は、このヴァージョンを紅劇場で功夫伝奇として上演する。そしてそこでは、カンフーの禅的と中国的基礎づけは変えないものの、ストーリーを、一人の男児が少林寺に入門し、さまざまな困難を克服して成長し、ついには寺の方丈となって没する生涯を、派手なカンフー演技をはさみな

から展開する手法をとる。功夫伝奇は成功をおさめ、アメリカに常設館を設け、また世界を巡演するようになる。ここで本論文作成者は、上演されたショーは外国人の期待する中国文化イメージつまりサイドの言うオリエンタリズムを逆手にとったセルフ・オリエンタリズムの表現であることをショーの徹底的分析と曹の発言とから分析するが、秀逸である。2004年に有数の観光地である桂林の陽朔に民歌の歌い手である劉三姐をテーマにし、これに少数民族の風俗や生活を織り込んだ野外ショー「印象・劉三姐」を梅帥元が展開し、地元膨大な経済効果をもたらすと、成功を聞き及んだ少林寺方丈の釈永信は少林寺における武術ショーの創作を梅に依頼する。これを容れた梅は少林寺を訪ね、また中国文化を研究する大学教授の教えもいれて、カンフーを「功夫伝奇」と同じ禅の修行文化のなかに位置づけ、舞台を、「禅の境地」,「禅定」,「禅武」,「禅の悟り」,「禅を讃える」の5幕によって構成するスタイルを編み出す。このとき、音楽を担当した潭盾はアメリカのコロンビア大学で博士号を取得した音楽家で、西洋人好みの東洋イメージを楽曲で表現する手法をショーに導入する。このようにセルフ・オリエンタリズム的構想である点で梅のショーは先行した曹のショーの延長線上にあると位置づけられる。

カンフーの文化産業化の前提となったのは少林寺における武術の歴史と文化であった。「少林寺における武術の復興」の章では、かつてとはちがって1980年代以前の少林寺には長らく武術の伝統が途絶えていたこと、復活のきっかけとなったのは1982年の映画「少林寺」の大ヒットであったこと、これを機に登封市に多数の武術学校が設けられ、また観光客が急増したことが述べられ、そうした過程のなかで、少林寺方丈釈永信によるカンフーのブランド化の問題が「近代化における少林寺武術」の章において分析される。方丈のブランド化の願いは「少林寺実業発展有限会社」の立ち上げに結実し、そこでは少林や少林寺の商標登録と、その不法使用の監視がおこなわれるようになったが、ブランドとしての少林カンフーの他の類似武術との差別化を正当性 authenticity の付与によって担保するための方丈創作の「武術禅」「禅武合一」「拳禅融合」といった用語とその内容が分析され、これが世界無形文化遺産登録をめざす経済的動機に発したものであること、武術の技術学習論から誘導されたものでなく、ために整合性が十分でないこと、方丈の主張する禅と武術の融合がかつて存在したことは疑わしいこと、また日本の武道の思想的影響も認められるなどの指摘は鋭い。

「まとめ」において、少林カンフーが中国を代表する国際ブランド武術となる過程がセルフ・オリエンタリズムの視点から簡潔にまとめられる。

なお、本論文が発表された学術論文は、「村橋俊之,中国武術の文化産業化:功夫伝奇を事例として,スポーツ人類学研究,13号(印刷中)」である。

本論文は、設問のオリジナリティーの高さ、豊富な中国側資料の分析の鋭さと論証の確かさをもち、結論も妥当であると判断される。これによって博士(人間科学)の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上